

南丹市の地域社会と佛教大学の 地域連携活動に関する研究

——アフターコロナを見据えて、美山の観光の現状と今後の課題を検討する——

高 御 堂 厚

【抄録】

平成元年より30年以上、観光による地域の活性化を目指してきた京都府南丹市美山町の今と20年後の未来を見据えた課題を顕在化するために2020年2月20日に地域住民からヒアリングを行った。観光課題である消費単価の低迷、地域内調達率の低迷、少子高齢化、過疎化による地域の弱体化などを踏まえての議論となった。

その結果、観光でまちづくりの可能性を探ることの重要性の提議や村の暮らしや景観を守ることが観光資源を守ることの意味、美山は既にSDGsを実践している社会、生きがいが生業になることが観光、観光は地域にある資源を形にすること、中高生にとってアンケートを基に未来を考えることが望ましいなどの意見が出された。共通課題として、地域住民が観光に対する認識が低いことがあげられた。大学との協働により美山町の活性化に寄与したい。

キーワード：観光、まちづくり、アフターコロナ、SDGs

1. はじめに

佛教大学は2004（平成16）年に旧美山町と大学との間で地域連携協定を結んだ。学外をもうひとつのキャンパスと位置づけ、より実践的な研究、教育を目指し「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」を基本理念とした。包括的連携のもと、教育、福祉、文化およびまちづくり等の分野において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成を図ることが目的とされた。筆者は、非常勤講師として美山町において観光による地域活性化の可能性を模索しつつ2006年より社会学部公共政策学科のフィールドワーク実習を担当し、2013年から初級地域公共政策士養成講座を担当した。

過疎地である美山町では急速な少子高齢化の中で、コミュニティーの弱体化、農地林地の荒廃、経済の衰退、伝統文化の消滅等々の課題が山積しており、産官学公連携、大学との連携の中で新たな解決策を模索してきた。しかし、問題は複雑で様々な関係者の利害関係、旧村意識、まちづくりのベクトルの違い、経済力、人材力等がその解決を阻んでいる。

この研究では、美山町の産業の柱でもある「観光」と「まちづくり」という視点でおこなった美山町の20年先の未来の姿について各分野で活躍されている美山町の方々の意見をまとめるこ

とで今後の、研究の指針となる基礎資料としたい。

2. 美山町概要

美山町は、1955（昭和30）年に大野、宮島、鶴ヶ岡、平屋、知井の旧5ヶ村が合併して誕生し、2006（平成18）年に園部、日吉、八木、美山の旧4町が合併して南丹市が誕生した。町域面積340.47km²に約3,600人が生活している。96%が山林で由良川の源頭部を抱えている。京都大学芦生研究林が代表する学術的にも貴重な自然が残り、農山村の原風景を象徴するかやぶきの里（国の重要伝統的建造物群保存地区：1993（平成5）年選定）が訪れるものに日本のふるさとを想起させる。

2018（平成30）年には美山町全域を含む京都丹波高原域が国定公園に指定され、豊かな自然景観とかやぶきの里の町並みの風景が評価された。

2021（令和3）年4月の高齢化率は48.1%、人口は3,559人で人口問題研究所の推計によると2030年には高齢化率60%、人口は2015年に比べ44%減少することになっており、急激な過疎化は止めることのできない現実として地域に突きつけられている。

3. 美山町の観光の現状と課題

1989（平成元）年に都市と農村の交流を目的として旧美山町役場にまちおこし課が設置された。また、同年、宿泊施設、レストラン、多目的グラウンド、キャンプ場、会議室等を備えた美山町自然文化村を開設し都市と農山村の交流を推し進めることで地域の雇用促進、文化の発信、スポーツの振興をおこなってきた。当初20万人程度といわれていた観光入込客は、2003（平成15）年には70万人を超え、2019（平成31）年にはインバウンドの急増により100万人近くまで押し上げた。

美山町の観光は、かやぶきの里が牽引してきた経過があり、現在でもその存在は大きく、様々な観光商品の造成に大きな影響を与えている。30年に渡る美山町の地域活性化の実績が評価され、近年、農水省「ディスカバー農山漁村の宝」の優良事例に選定、エコツーリズム大賞優秀賞、ツーリズムEXPOアワード地域部門賞を受賞した。

また、2021年（令和3年）12月には、国連世界観光機関（UNWTO）によりベスト・ツーリズム・ビレッジに選定され世界的な評価を得た。評価基準は、持続可能な開発目標（SDGs）に沿って、地域において新しい形で観光事業を実施する地域（9つの評価分野）で、文化・自然資源、文化資源の振興と保全、経済・社会・環境分野の持続可能性、観光の可能性と発展・バリューチェーン（価値連鎖）の強化、観光分野のガバナンス、アクセス・インフラ、公衆衛生、安心・安全である。

観光の課題として挙げられるのは、消費単価の低迷である。2019（平成30）年度の消費単価は1000円前後で京都市のそれと比較すると22,000円で約1/20に留まっていることは、観光による地域の雇用促進や給与水準の向上に果たす役割が低いということになる。売上実績の向上だけのものさしではなく、地域にお金が落ちる、即ち地域内調達率の向上が必至で、地域に対する誇りや愛着、観光で稼ぐという意識の向上無しでは実現できない課題である。

このような課題を解決するため、2017（平成29）年に観光庁が推進する日本版DMOの設立に呼応し一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会（登録DMO）が設立された。これにより美山の観光を稼げる観光産業に育成する事業が始まり、現在その取り組みが地域と連携しながら推し進められている。

4. まとめにかえて

農山村、中山間地域の活性化は、長年全国で様々な取り組みが行われてきた、観光は地方創生の切り札として推進され観光立国推進法のもとに施策がおこなわれている。今回、登録DMOを組織し観光の産業化を目指す京都府美山町において、「美山町の20年先の未来の姿について」思うところを地域の方々に語っていただくことで課題を顕在化させた。観光で稼ぎ暮らす地域とは、観光がもたらすものは何か、若者たちに問いたい。

ところで、地域で暮らしたいと思えることはどんな物差しがあるのか。例えば、やりがいのある仕事、それとも子育て教育の環境、豊かな自然の中での暮らし、人と人とのつながりが実感できる生活、相互扶助の社会といったことが想起できる。その人にとってのものさしで幸福度の違いを認識することはまちづくりには重要となる。

そして、IターンやUターン、地域に住み続ける人の物差しは違うものであるかもしれないということを前提に、それぞれが自らのライフスタイルを実現できる地域とするには、令和3年度に策定された美山観光ビジョンや地域の誇りを形（商品）にするための地域経営、観光地経営の視点が不可欠である。

最後に、2020年1月上旬に国内で確認された新型コロナウイルス（COVID-19）感染症拡大は、美山町の観光事業にも多大なる被害を与え続けているが、今後のアフターコロナを見据えて、美山の観光の現状と今後の課題を検討してみる。

コロナ禍において注目すべきは、町内で新たな宿泊施設が開業していることである。現在30軒ある宿泊施設の内5件がコロナ禍で開業している。それぞれが美山の古民家を活用し個性ある営業を行っており、例えば教育民泊歓迎の宿、フォトスタジオがあるおしゃれな宿、アートとハーブの宿、アウトドアで由良川を見下ろす宿など多くは一棟貸しの宿で多様性に富んでいる。このことが示唆しているように前述した美山町がベスト・ツーリズム・ビレッジに選定され、従来から実践してきたグリーンツーリズム、エコツーリズム、さらにSDGsな観光地としての評価

がアフターコロナの観光のひとつの方向であろう。

つまり①地域の自然や文化、②地域社会、③地域経済の3つの要素がバランス良く生かされた観光まちづくり、即ちサステナブルツーリズム（持続可能な観光）、リ sponsiブルツーリズム（地域に対して責任ある観光）を求める国内外の旅人にターゲットを当て、旅することで地域活性化や環境保全に貢献できることを実感できる観光を目指すべきであると考えます。

持続可能な観光では、感動的な豊かな自然や深遠で印象的な伝統文化的観光資源を保護し継承されること、そのためには地域で暮らすことができること、即ち地域経済と精神の自立が不可欠であり、責任ある観光の実現には、観光することによる地域貢献の見える化や地域住民とのつながりが自覚でき、感動や課題を共有することが不可欠である。そして、何よりひとつひとつの観光コンテンツの磨き上げだけでなく地域観光を動かす「仕組みづくり」、「人づくり」が求められる。

参考文献・資料

- 一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会 2019（令和元）年度総会資料
京都府商工労働観光部 2018（平成30）年度京都府観光入込客調査報告書 2019（令和元）年7月
南丹市 人口・世帯数集計表・年齢別人口集計表 2021（令和3）年3月
国立社会保障・人口問題研究所 日本の地域別将来人口推計
美山町 京都府美山町における村おこしの取り組みと課題 第9回改訂版 2004（平成16）年10月
美山ナビ <https://miyamanavi.com/>

（たかみどう あつし 共同研究嘱託研究員／美山ふるさと株式会社常務取締役）